大分合同新聞社

大分合同新聞

渡辺克己著

第六章●堀川かいわい

Next

初版：2007年9月14日発行

第六章●堀川かいわい

【写真】工業学校前を走る電車（大正年間の撮影）

・大分の味
・堀川の酢屋
・千代田焼き
・むかしの堀川
・二万一千石じゃせまいせまい
・堀川を見捨てる
・平家の落人
・渡り鳥のカキ船
・栄枯盛衰
・腹ぶとジャコ
・魚河岸こと始め
・回り舞台

奥付け／デジタルブックについて

発刊に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和37（1962）年11月から翌38（1963）年12月末まで、1年2カ月にわたり大分合同新聞に295回連載され、連載から20年後の昭和58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和37、8（1962～63）年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。

工業学校前を走り終点の現中央通りに向かう電車（大八車の後方、大正年間の撮影）

大分の味

大分名物いおうなら
　堀川名産まんじゅうで
酢屋と水野はだれも知る
　電車待ち合い千代田焼き

明治年代に歌われたものだが、だれが作詞をし、どのような方法で流布されたものかわからない。ただ明治生まれの人々は口から耳へと歌い聞かされたこの歌詞が、おぼろな記憶の底から、断片的によみがえって昔恋しさを誘うだけである。

この歌詞にしても、竹町を歌った「宿屋は八百屋で甲斐の隣のユウケンさん…」にしても、かつての大分っ子は、この土地を限りなく愛し、そして誇りとして、町々のたたずまいの一つ一つを楽しく胸にたたみこんでうたったにちがいない。そんな郷土愛をかみしめるような歌詞である。

まんじゅうは、むろん「堀川まんじゅう」のこと。酢屋は堀川町に広大な屋敷をかまえていた素封家幸松家。水野は水野屋という旅館。堀川町を通っていた電車の車庫があり、そこにあった待ち合い所の向かいに「千代田焼き」という焼きモチ屋があったわけだ。

終戦後外地から引き揚げてきた老婆が、第一にいったのは「堀川まんじゅうを食べたい」ということだった。故郷に帰ってきた感懐を、わが胸に語りかけるようすがとして、娘時代に舌に親しんだ「堀川まんじゅう」を食べたかったのである。老婆のむすこは、焼け野が原となった大分市内をたずねたずねて堀川町

に行ってさがしたが、むろんあろうはずはない。老婆はとうとう「堀川まんじゅう」を食べずに死んだ。

いまは復活して売り出されている「堀川まんじゅう」をかみしめながら、ある人がしみじみとこんな思い出を語ってくれた。

「堀川まんじゅう」は徳川時代の末ごろから堀川町で売り出されたものらしい。戦後、二十八年に復活して、もとの位置にあたる付近で、ひっそりと製造をしている老主人磯崎喜平さんの話によると、三代前ぐらいに柳屋という屋号で店を出したという。この柳屋に続いて、伏見屋、千歳屋、米屋などという店があいついで店を出して「堀川まんじゅう」を売ったがいずれも消えていって、結局いちばん最初に店を出した柳屋一軒だけが最後まで残っているわけ。

喜平さんがおぼえている「堀川まんじゅう」の値段は、一つ二厘五毛、その次が五厘、一銭、昭和十六年に砂糖や小麦粉の統制で店を閉じるころは二銭だった。現在は三つが十円。

コウジを入れた、きちっと歯ごたえのある皮の風味は他にまねのできない大分の味である。

堀川の酢屋

いまの大分統計調査事務所を中心にした一帯に府内の素封家酢屋幸松家があった。酢屋の家号からみるとおり藩政時代から酢の製造をやっていた旧家。ここの酢を豊府酢、桜町の橋本屋の酢を府内酢と呼んだという。府内にはこの二軒が藩の保護下に酢の製造をしていたのである。廃藩置県で、明治五年一月

二十三日に大分県庁が開庁したとき、堀川の酢屋幸松雄三郎邸を仮庁舎にし、二カ月ばかりここで政務をとっている。後荷揚町の遊焉館（藩学校の跡）に庁舎を移し、さらに同年九月に府内城跡に移転した。

初代知事（当時は権令といった）森下景端も大分在任中、酢屋の邸宅の一部を提供させて知事舎宅とした。森下権令はそこから衣冠束帯のものものしい服装で、随員を従えて登庁していた。

森下権令のひとり娘治子さんが十八歳の花ざかりをこの酢屋の舎宅で病死した。このときの葬式が、地方の小藩主をしのぐ権勢を持つようになった県知事の威力をみせる豪華なものだった。大手通りから治子さんの霊を葬らった松栄山のふもとまで川砂を敷きつめさせ、その上を葬列が延々とつづいた。まさにお殿さまの葬列だと、その豪華さは近郷近在のうわさのタネとなった。

森下権令は四年七カ月の大分県在勤ののち明治九年依願免官となって郷里岡山県に帰ったが、松栄山ろくの池畔にある治子さんの墓はそのままとなり、たずねる人もなくコケむした。いまも、護国神社にのぼる石段の左下方に、草に埋もれてある。

森下権令の在任中、明治五年十二月二日、大分郡庄内谷の農民が廃藩置県の県政に不満を表明していっき（一揆）を起こし、近隣の農民も呼応して県庁に押しよせてきた事件がある。

新しい政治による過渡的な各種の不合理にたいする不満、経済的な苦痛、二年前にも起こした暴動のさいにとらえられた村民の解放、その他さまざまな要求をかかげ、生活の安定をはか

れというのが暴動の理由だった。

このとき、大道から西新町に襲来し、笠和口から府内に侵入してきたのだが、町民はふるえあがってしまった。数百人の暴徒は県庁前まで押し寄せ、市内の旧家をたたきこわすなどの暴行をはたらいたのである。

このとき堀川の酢屋も、知事の舎宅となっていることだし、まっ先に襲われたのだが、こんな笑い話がある。

酢屋の玄関になだれ込んだ暴徒のひとりが、ふと玄関の式台の横を見ると、小さなビンがある。取り上げてみると中には黒いねばっこいものがはいっていて、なかなか良いにおいがする。

「官員のやつ、こげなぜいたくなものを食べよるんだな」

彼の叫びに、数人のものが寄ってきて、指をつっこんでひとくちずつなめてみた。そして口のまわりをまっ黒にして大いに気勢をあげた。その黒いものは、森下権令のクツをみがく、ハクライのクツ墨だったのである。

千代田焼き

水野旅館はいまの杉村医院の敷き地いっぱいに建っていた。堀を背にして大きな玄関をかまえた堂々たるつくりで、ひたひたと潮がはいってきた堀に、客室のあかりが詩情をたたえてうつっていた。

明治年代の大分町を紹介した本にこう書いてある。「旅館のおもなるものは八百屋（竹町）水野（堀川）桜屋（本町）麹屋（室町）油屋、鈴屋、平野屋（魚町）等にして…」

第一に八百屋、次は水野に指を折られていたわけ。

電車は最初、この水野の前が終点だった。歌の文句の「…電車待ちあい千代田焼き」の電車待ち合い所は北新町から出たところの左かど、いま加藤クリーニング屋のあるあたり一帯に広い車庫があって、その一角に待ち合い所があった。電車会社の豊州電鉄本社は別府の浜脇にあったが、電車はすべて堀川の車庫におさまっていた。車庫の周囲にはまくら木のサクをめぐらせ、そのころでは珍しい洋服の運転手や車掌がえらそうにうろついていた。

この車庫の向かい側に千代田焼きの店があり、焼きモチの香りをあたりにただよわせていたわけだ。

先日あそこを歩いてみたら、ちょうど千代田焼きのあった場所…拓成土木のへいが切れたところに回転焼き屋さんがひっそりと、たそがれの灯をともしていた。この回転焼き屋さんの位置が千代田焼きの店だった。

千代田焼きというのは、モチ米の粉をねったものに、たっぷりアンコを包んで平べったくし、鉄板の上でこんがりと両面を焼いたもので、直径七、八センチあった。ひとつ一銭だった。

この千代田焼きが当時の人々に親しまれたのは、焼きたてのほっこらした味わいが庶民的な味覚に合ったことと、電車の待ち合い近くにあって乗降客がちょっとつまんでゆくのに便利だったためだろう。

これに似た焼きモチは大分川の坊ケ小路の渡し付近や、下郡の街道筋にも明治時代にあった。うまさは千代田焼きにおよばなかったかもしれないが、だいたい似たりよったりの素朴な焼

きモチであった。

ここから北新町の方へちょっとはいると共楽館、あそこの前から小路へ足をいれると、置屋やあいまい屋が軒灯をつらねていた。そんな店のネエさんたちが、夜のすき腹をみたすために小銭をだしあい、中のひとりが代表になって買いにきた。焼きたてのあたたかいのをたもとにくるんで小走りに帰っていく。そういう風情を思い出すと千代田焼きもいっそうなつかしさがこみあげてくる。

むかしの堀川

堀川町付近のもとの地形を思い出してみよう。

舟がはいっていた堀川港は、いまの堀川町大通りの広い道幅いっぱい。それにいまの辛島医院や長久堂のある一帯の町並みが堀の中に当たる。

西はいまの川口米屋の手前のところで切れて、大分精米所にはいる道が横ぎっていた。東はいまの勧銀の横から電車通りをつっきって中島の裁判所前通りにのぞんでいた。裁判所前のいまの大きな道路はもとは両側にアシのはえた川で府内城の東側を流れる川があそこに流れてきて、堀川港につながっていたのである。ここも相当広くて満潮時は潮が上ってきた。そして勧銀の裏のかどあたりから、北にまっすぐに堀が伸びて、住吉川にそそいでいた。その川幅は現在の電車通りよりも広いぐらいで、いまの千代町一帯はこの堀川の中、両側にアシが繁り、潮が満ちてくると、まん中の深みを相当大きな船が上ってきて堀

川港に泊まった。

堀川町はいまの勧銀の向かって左側を入るのが本通りで、あそこから斜めにまっすぐ大分工業高校正門前の通りに線を引けば、もとの堀川町本通りの位置がだいたい浮かんでくる。この通りの軒すれすれにチンチン電車が走った。大正十年に催した九州沖縄八県連合共進会が新川で開かれたさい、現在の浜町から春日浦海岸を走る道路工事が行なわれ、大正の末に電車もそちらを回るようになった。

堀川町の町並みの北側の家はだいたい一ならびで、その家の裏は一間たらずの細い道をへだてて堀川港にのぞんでいた。堀川港の北側が船頭町。現在の辛島医院の裏側の道をへだてて北側の家はいまも土地が高くなっているがあの高くなっている一帯がもとの船頭町で、藩政時代は、府内藩ご用の船頭さんが居住していたのである。

竹中半兵衛（豊臣秀吉の軍師）のいとこ竹中重利が慶長年間に府内城主として入府したとき、福原直高が築城した荷揚城を、加藤清正の知恵をかりて大改築をしたが、そのさい重利の軍船奉行に市橋太郎兵衛という人がいて重利に願い出た。「城の西北に沼河があるが、これを私にいただきたい。埋めたてて私の居宅とすれば、城のため敵を防ぐに大利があります」重利が許すと、組み下の船頭ら百人あまりをさしずしてこれを埋め、高崎山から石を運んで石がきを四辺に築いたと昔の本にある。この軍船奉行の居宅がいまの勧銀の位置。

これが動機となったのか、その数年後に藩命で堀川を構築し、商船を出入りさせるようになった。

二万一千石じゃせまいせまい

堀川の歴史は慶長十三年（一六〇八年）に始まる。府内城主竹中重利が「城下の西北のすみは舟泊の便に適しているので、ここに堀江を開き、領内はもちろん、他国の商船がはいるようにすれば府内の繁栄になるだろう」と工事を起こし、数カ月で完工した。これを堀川と名づけ堀川の入り口に舟泊まりを設けてこれを「京泊」と呼んだ。

（いまも〝升形〟と呼ぶ石がきで築いた舟泊まりが新川東地区にあるが、これは寛政年間に大給藩が〝新升形〟として構築したもので、竹中重利が作ったのは現在のものより上手にあたる）

また竹中重利は堀川に海賊などが入りこむのを防ぐとともに暗夜入港する船に「京泊」の位置を知らせるため「京泊」と堀川の中央に高楼（いまの灯台のようなもの）を建てて夜は灯を入れ、また士卒を常置して出入りの船を見張らせた。

この高楼の位置ははっきりしないが、大正年代まで住吉川の川口近くに高い盛り土をして、その上に高い灯ろうのようなものがあった。これを土地の人は灯台と呼んでいたそうだが「京泊と堀川の中央」という位置ではないから、これはその高楼とは別もので大給藩時代に造ったものだろう。

この堀川はドロに埋まりやすいので代々の藩主は川さらえをよくやっている。竹中のあとにきた城主日根野吉明は寛永十七年（一六四〇年）に工を起こし、数カ月かかって堀川のドロあげをしたという記録がある。

また堀川ができて百年ばかりあと、大給藩時代の宝永ごろは、

堀川も京泊も、船の出入りに困るほど埋まってしまったので、府内の町人からの願い出によって藩で調査することになった。ところが宝永四年（一七〇七年）の八月、台風が襲来して京泊が破壊、さらにその年の十月に大地震が起こって着工は延期となり、正徳元年（一七一一年）にようやく築港と川さらえに着工している。

ところが民営としたために工事が進まず、費用がかさむばかりで一年たってもまだできない。そこで問屋や船頭らが工事費用をつくり出すために藩の許可をえて、住吉神社のお祭りなどで「富くじ」を催している。この第一回の「富くじ」で大工町の市左衛門という人が一等くじに当たり銀二百目を受け取ったという。こうして着工後五年目に完成した。このときから、この「京泊」の港を「升形」と呼ぶようになったとある。

享保十四年（一七二九年）に天神町の吉左衛門という人が、家運をばん回するため、藩の許可をえて「京泊」から堀川までの川底をさらえ、はいってくる船から舟泊まり代二朱を徴収したという。有料港の草わけみたいなものだ。

しかし豊後湾の港には、肥後領の鶴崎港、岡領の三佐港、天領の乙津港などがあり、これに比べると堀川港は小さかった。大阪から千石船が堀川港にきたがはいれず、乙津港に回航して「二万一千石じゃせまいせまい」と悪口をいったそうだ。

堀川を見捨てる

藩政時代の殿さまは堀川の川さらえをせっせとやったが、何

しろ、さらえてもさらえても大分川と住吉川から押し出してくる土砂には手を焼いた。明治時代になってからも大分町の有力者が町の発展のために川さらえにせいをだしている。

「いわゆる豊後の名のいにしえにかえすときと大いに喜んでおりますが、それには運輸の便を開き商業を拡張することに努め、三百年来のうっ屈をおいおいばん回したいと思います」と、明治十二年に県令香川真一に堀川修復を請願し「オランダ製の新式川掘り機械を購入したい」と願った。

県ではさっそく内務省に照会したところ、内務省土木局でもその機械がほしくて目下注文中であるというわけで結局「相廻り不申候」という返事。町の有志はせっかくの意気込みの出鼻を折られたかたちとなった。

その翌年、県令も西村亮吉の代となったので、ふたたび町の有志が発起人となって川さらえ工事を出願した。その総工費は三百九十三円五十八銭八厘と見積もられ、普通人夫賃十五銭、川さらえ人夫賃十二銭と計上されている。いまの四百円はひとり分の日当にもならないが、当時はたいした金額である。

これを町有志が負担して川さらえをし、石がきを修築しますというのである。当節は一にも二にも国営だ、県費補助だ、市の負担だと運動し、他人のフンドシで相撲をとるのがじょうずになったが、明治時代の大分町の人々には町発展のために私財を投げだすのは当たりまえのこととされていたのである。

しかし、この工事中に、大水や土砂崩壊などがあって最初の予算では工事を続行できなくなった。そこで町総動員のかたちで第二次計画を立て直すことになった。

ところで県土木課の応援を得て調査したところが、再改修費は一万円かかるという。この金額にはさすがの町有志もおどろいた。といって、これまでの努力も水のアワにはしたくない。そこでこんどは大分町、勢家町、今津留村（東大分）の総代が協議して再度西村県令に再改修の願書を出した。工費は三千九百二十四円余、そのうち千七百十三円余は町内有志が負担しますというのである。

これで許可となり大改修をやったが、いくらやってもちょっと大水がでるとたちまち埋まってしまう。まさにドブ川に金を捨てるようなものだと気がついて新港をカンタンに築く論が起こった。このとき町内有志の間にも賛成反対の大論争がまき上がったが、結局「百年の大計」をたてるにはカンタンにしくはないと一決し、明治十五年に大分築港株式会社が設立されてカンタン港発足となった。これで堀川は見捨てられてしまった。

平家の落人

明治十四年の堀川港には、船問屋が二十七、新川に運船が大六、小十三あったと記録されている。

明治十五年にカンタンの築港ができてから、堀川は見捨てられ、底には泥が深くなる一方だったが、満潮時を利用すればちょっとした船は結構出入りできたから町から遠いカンタン港を利用しなくても、堀川港は大分町の玄関口としてまだじゅうぶん使いものになった。

だから当分はカンタン港はあっても、まだ堀川港は小帆船に

とって便利な港だったはずである。

堀川の一部が埋められたのは大正年代になってから。西の方はいまの大和醤油工場付近まで埋められ東の方は電車通りに突き出ている部分が中島の方のミゾとともに埋められた。その埋めた上を電車軌道が浜町の方へ抜けた。

この堀川へ上ってくる船で、市民に親しまれたものに海辺、佐志生、一尺屋あたりからミカンやイモアメ、海産物の干物などを売りにくるいわゆるシャー船という物売り船と、広島から冬季にやってくるカキ船があった。そのほか津久見あたりから石灰などを積んだ船もはいってきた。

この物売り船の人たちはシャーと呼ばれるのをたいへんきらったらしいが、シャーと呼ばれる人たちは臼杵の海辺あたりに住む漁民で「もとは平家の落人じゃあわい」とそのことを誇りにしていたし、一般の人もそう信じていた。シャーの語源は知らないが、とにかくそう呼ぶことが、この人たちへ親しみを感じる愛称のようなものだったにちがいない。ところが一尺屋、佐志生付近からくる人にたいしても見さかいがつかず同じように呼んでいたらしく、なおきらわれたようだ。

この物売り船は長い間堀川に船を泊めて船の中で自炊生活をしながら大分の町を行商して歩いていた。半切り（タライのような物を入れるオケ）を頭に乗せ、カスリの着物に前だれかけの、それらの婦人の姿は、京都の町へ物売りにくる大原女の風俗を思わせるものだった。故吉田地平さん（南大分小学校長などした人、上田大分市長夫人のおとうさん）が書き残した明治回顧誌に次のようにおもしろく描写している。

「この人たちは家族全部を引きつれ半年も一家だんらんの生活をしていた。おかみさんが半切りに商品をつめてこれを頭に乗せ、尻を振ってカジをとり〝オッカさんいらんかえ、ミカン、ワカメ、メザシ…ちょっと降ろさせてくだんせ〟と頭の荷物をホッと置いて、売らずにゃ帰らん強腰に降参して何か買わされた。その商売じょうずには感心する。この人たちは平家の落人で、正直な人たちだし値も安い。おやじは毎日船でるす番のカカア天下だ」。

渡り鳥のカキ船

北風が吹きはじめると広島からカキ船が来るのが毎年のならわしとなっていた。

カキ船が初めて大分を訪れたのは明治四十一年。堀川港のいまの勧銀の裏に当たる付近の岸に船をつけ、干潮のさいにも傾かないように船底を固定した。そして甲板に客室を組み立て「かき清」の屋号を記したちょうちんなどが下げられると「ああカキのうまい季節がきたな」と冬の味覚がよみがえるのだった。

名産広島ガキで一冬を大分の町の人々の舌を喜ばしたカキ船は、春になると堀川を引き払って広島へ帰っていった。ちょうど渡り鳥が季節を告げておとずれ、そして帰ってゆくような、なつかしい存在だったわけだ。

このカキ船やシャー船など、市民に親しまれた船が上ってこれなくなったのは大正十年。電車路線が浜町の方へ延びて、住吉川に橋がかかったために船の往来ができなくなったからだ。

しかしカキ船の「かき清」はすっかり大分になじんだためにこの機会に大分に定着してしまった。昭和七年ごろに堀川は完全に埋め立ててしまったが、それまでは堀川の岸に船を固定したまま営業を続け堀川を埋めてしまうと、船を勧銀の裏に上げて「船の料理屋」として営業をしていた。

この「かき清」は、飯田勇吉さんと、むすこの清一、勇作さん親子の経営だったが、勇作さんは「かき清」が大分に固定した翌年独立していまの中央通り郵便局前付近に「かき清支店」を出し、さらにいまの商工会議所のところに移ってすっかり大分に根をおろし昭和五年から「菊水」の名に変わって塗師町の現在地に開店した。

いま東邦生命のある隣、内尾歯科医院のあたりに、明治時代徳島県から移ってきた奥川直次郎さんという人が「阿波屋」という海産物問屋を開いた。

これが現在西新町で大きく店を出している奥川元市商店の出発点である。当主の元市さんは、直次郎さんのむすこ。元市さんは東京に遊学し外国語学校などに学んでいる。若いころは海産物問屋の主人などより、もっと大きなたとえば海外雄飛の志を持っていたかもしれない。大正初年ドイツの捕虜が大分に収容され元市さんが通訳官になったとき「へえ、元市さんに通訳ができるんかいな」と堀川かいわいの人々は目をみはった。

阿波屋はその後、現在の千鶴旅館の向かい側に移り、戦災で焼けるまで動かなかった。

京町の奥川食料品店は元市さんのオジ助太郎さんが阿波屋からわかれて「徳島屋」乾物店を京町で開いたのが始まり。

栄枯盛衰

海からの玄関口であるとともに、明治三十三年に電車もはいってきて、堀川が大分の発着地となったという地の利が、堀川かいわいを繁栄させた。

いまの勧銀のうしろ（いまは材木置き場、明治三十四年から十年間大分魚市場があった）に青表を集散する藩営の「莚会所」があった。これは藩政末期ごろ青表を藩の財源とするため専売制として堀川に会所を設け、ことごとく買い上げていたのである。明治新政になって藩の重役が「莚会所」あとを引き継ぎ会社組織にしたらしいが長く続かなかった。このあとに初めて会社組織となった大分魚市場が建ちさらにそのあとは有永眼科医院が使っていた。

その隣に住吉屋という古いくだもの問屋があった。住吉屋のあととり森嘉作さんは、問屋を発展させて青物市場を長浜町に設立したのである。

水野旅館の西隣に明治から大正にかけて柚須粂蔵さんの経営する株屋があった。室町にあった西田株式店とともに大分における株屋の草分けである。柚須粂蔵さんは西新町にあった米穀取引所の有力な仲買い人で大いにもうけ、明治三十七年に米穀取引所が解散したあと証券取り引きの店を出したわけだ。

明治末から大正初めにかけての好況時代は株屋はもうかって笑いがとまらなかった。札束をカバンにつめて共楽亭あたりではでに遊んだらしい。粂蔵さんのむすこの辰一さんは「いま紀文」とうわさされるほどの「おだいじん遊び」をしたので評判

となっていた。

ところが、大正九年のガラ（大暴落）で柚須と、大正の初めから室町で開店していた岩田章蔵さんの店が倒産した。生き残った西田株式店は、番頭だった山田豊さんがあとを継いで中上市町に移り、のちに日興証券に合併した。

いま大和醤油のあるところは、おもしろいことに入れかわり立ちかわり同じ醸造業が続いている。

古くから「岩田屋醤油」の工場だったが、岩田虎一さんのときやめた。そのあと高田保さんの出資になる「高田みそ」を製造。つづいて「高田みそ」の番頭だった筒井秀吉さんが「大分みそ」の工場にした。

「大分みそ」は戦災で焼け、戦後中島五条に工場を新築して移っていった。その焼けあとに西新町から現在の「大和醤油」が移って現在に至っているしだい。

一つの小さな地域にも、ふりかえるとこれだけの栄枯盛衰がつづられているのだ。

腹ぶとジャコ

大分郡内で生産された七島イのムシロ（藩政時代は琉球表といった）は大阪方面に盛んに積み出されていたが、その積み出し港は堀川であった。

七島ムシロ生産はもうかったとみえ、藩政時代に城下でも栽培する者がふえていた。宝永四年（一七〇七年）の記録に「仙石橋西道下南方アシの生えたところを勢家庄屋太左衛門に。芦

崎御舟倉北水見軒の堀跡を細工町六兵衛に」七島イの栽培を許可したとある。

これら七島ムシロを堀川港から積み出すについて、海上安全のため延宝五年（一六七七年）に粗物仲間（あらものなかま）が住吉神社を建立した。「粗物」とはムシロを扱う業をいったもので、最初桜町の橋本屋八左衛門（琉球から七島イを移入した五郎左衛門の兄）室町の桜屋助右衛門、竹町の八百屋八右衛門、上紺屋町の大津屋善四郎の、代表的ムシロ問屋四人を粗物仲間と称したのである。その後粗物仲間は二十人ぐらいにふえている。もちろんそれはムシロが藩の専売事業になる前のことである。

住吉さまは、もともと沖の浜（浜町）に住吉大明神として鎮座していたが、天正十四年（一五八六年）島津軍が府内に侵入したさい兵火にかかり荒廃していたのを、慶長年間に西応寺に移し小さなほこらにまつったもの。これを粗物仲間の発起で現在の位置に社殿を建立して遷座したのである。

この住吉神社の前の仙石橋は歴史のある橋で豊臣秀吉が島津征伐の先手として、天正十四年に讃岐城主仙石権兵衛らを府内にさしむけた。大友義統は大いに喜んで一行のためにここに橋を新たにかけかえて迎えた。それで仙石橋というと伝えられている。そのころは土橋であったが宝暦三年（一七五三年）に石橋とした。アーチ型の姿のいい石造橋だったが大正初年に崩壊した。

この仙石橋のたもとにある村上利吉商店の「利吉煮」は有名な食品だった。沖の浜の漁師が豊後湾の沖でとったザコ（五、

六センチのハゼに似たイシモチともいう小魚。岸近くに群れているゴリとはちがう）を先々代の利吉さんが明治初年に加工して売り出したもの。腹に子をもっていて、それが特異なうまみで、酒やビールのつまみにはなかなかオツなものだった。

大正年代に大分県名産投票をやったさい、一位に当選したこともある。やはり大正の初め、いま大分魚市場の社長をしている二宮金一郎さんが洋行したさい、親しかった先代利吉さんが「利吉煮」を贈った。それをインド洋上であけて食べたところ、「赤道直下なのに味も変わらず、故郷の味覚をしみじみなつかしく感じた」という。この「利吉煮」も戦後復活をはかったが、浜町の漁師がザコをとらなくなったので絶えてしまった。

こんな歌が明治ごろ歌われていた。

大分名物腹ぶとジャコは、ちょっと頭に石がある。

魚河岸こと始め

勧銀の裏の道路をへだてた堀川町のかどは、いまはあき地で材木置き場となっているが、ここは明治三十四年に大分魚市場が設立されたところ。

「本町かいわい」の項でもちょっとふれたように、藩政時代は府内藩の御納戸（おなんど）事業として、魚町に市場を開いて魚の集散を独占し藩の大きな収入源となっていた。それが明治新政とともに御用市場は廃止され、その事業を請け負っていた平野重平さん（いま県地労委事務局総務審査課長をしている平野浩さんの祖父）が、こんどは個人事業として市場を独占的

に経営したのだった。ところが明治二十一年ごろ、魚市場の個人独占に不満を持つ人々が次々と問屋を開いて対抗するに至った。その皮切りをしたのは沖ノ浜の工藤宰次郎さんだという。

こうして問屋が乱立、その結果は激しい競争を招いた。仲買い人も魚屋も対立するという混乱状態となり、互いに経営は苦しくなる一方。これではいけないというので世話人が出て、明治二十五年に五つの問屋が合併して大分魚市場会社を創立した。その初代社長は渡辺芳一さん、常務は二宮吉之丞さん（現在の社長二宮金一郎さんのおとうさん）。

合併した五つの問屋は、浜町の吉松善四郎（浜町で医院を開業していた吉松辰男さんのおとうさん）魚町の平野重平、小野茂、平野与三郎、笠和町の平松重太郎（現在船頭町でかまぼこ製造をやっている平松董雄さんのおとうさん）の五問屋。

しかし、合併したとはいうものの、統一市場は持たず、それぞれの問屋が、会社の売店というかたちで運営されていた。こ

住吉さま付近（挿絵：田中 昇）

れでは便利が悪いというので、明治三十四年に堀川港に直結した魚市場を新築して、初めて一つになったのである。

当時大分魚市場に集まってくる魚は、西大分、佐賀関、臼杵、佐伯、遠くからは日向、伊予方面からも入荷することもあった。臼杵方面からは陸路を馬で運ぶこともあったが、おもに海上からの運搬だから堀川港にのぞんだ魚市場は「魚河岸」の名にふさわしい姿だったわけだ。

当時の大分魚市場は、毎日午前八時に開場、正午に閉じるのが普通で、魚の到着のつごうでは午後に開くこともあった。会社付属の仲買い人は百余人、いせいのよい魚をせる声が、堀川港の岸にこだましていた。一日の売り上げは二百円から多い日は三百円と明治三十五年ごろの記録にある。

ところが五つの問屋が合併したのに、浜町の清水準一郎という人の問屋だけが合併せず、あくまで独立の市場を守ってがんばっていた。これも明治四十二年に大分魚市場会社に買収され、その二年あと、四十四年に仙石橋のてまえに大きな魚市場を新築移転した。

回り舞台

大分魚市場が仙石橋のてまえに新築移転した当時は、あの周囲には家はあまりなく、橋のすぐそばに「利吉煮」の村上海産物店と、魚市場のうしろの方に大分精米所があり、そこから船頭町の住宅が並んでいるていど。

魚市場は、そのころもまだ市場内に第一売店、第二売店とい

うふうに、魚問屋が割拠しているようなかっこうで運営されていた。当時の売店は創立当時のものは平松と平野が残っているほかは、前々年に買収した清水があり、森嘉作、村上利吉、吉松善四郎など五人共同の丸万と、沖の浜漁業共同組合共販が参加していた。この売店形式は昭和になって会社直売に改められ、売店は消えた。

この魚市場が新築されてから市場に集まる人々を相手にする小店が付近にぽつぽつ建ちはじめ、道路も整備されてきた。最初、ここから浜町（沖の浜）に行くには仙石橋を渡って住吉神社の前を川にそってくだり、たんぼの中を通って行く小道と、威徳寺前の道路をくだるほかなかったのが、やがて魚市場から直線の道路が浜町に抜けた。

「明治の終わりごろのことだったが、何かのお祭りで、花電車が通るというので西応寺のへいのはずれに駆けて行った。あそこから先は住吉川にへだてられ、ずうっとイモ畑が広がっていた。その畑の中を、きれいな花電車が走って行った」。

威徳寺の爪生鉄雄さんの少年時代の思い出話である。あのあたり、いま羽衣道路が近代的な舗装を誇っているあたりから魚市場前付近にかけ、この思い出話のような姿だったのだ。そこに家がしだいに建ち並んだ。大正八年に魚市場の筋向かいにニコニコ館という映画館が新築され、昭和の初めごろ西応寺の南側の橋を渡ったところに昭和館という劇場も建った。

当時は浜町の漁師の景気のいいころで、宵越しの金は持たない荒っぽい金使いが浜町っ子気質と自他ともに許していたのだから、浜町に近い映画館や劇場も、これらの人でにぎわったの

だ。しかし二館とも寿命は短かった。ニコニコ館は設立後一年あまりで火災を起こして全焼、とうとう再建されなかった。昭和館も数年ならずして取りこわし、県南の方へ移っていったという。

先日、昭和館跡に行ってみたら、大きな円形を描いてコンクリートの土台のような形が残っていた。これが、昭和館の回り舞台の奈落に当たるところである。

過去から現在へ、そして未来へ…人生の回り舞台を、昭和館跡は語っているようだった。

（注）▽統計調査事務所は新川に移転し、旧事務所は現在、同所長宿舎などになっている。

▽大分工業高校は東春日町にあった。

オオイタデジタルブック

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別府大学

著者略歴◇渡辺 克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十三年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。

郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。

デジタルブック版「大分今昔」　第六章 ●堀川かいわい

2007 年 9 月 21 日初版発行

筆者　渡辺 克己

挿絵　田中 昇　（着色：佐藤 克治）

編集　大分合同新聞社

制作　川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行　NAN-NAN 事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社